

あなたがたは、代価を払って買い取られたのです

今日は、皆さんがよくご存知の小説「レ・ミゼラブル」のお話から始めたいと思います。主人公であるジャン・ヴァルジャンは飢えていた甥らのためにパン一個を盗み、19年間も刑務所生活を余儀なくされました。ジャン・ヴァルジャンは不義の社会で不当な待遇を受けました。このように不当な待遇を受けて生きてきたので、彼の心はねじれてしまいました。この世の中の人々が信じられず、敵対的に接するようになったのです。

ところが、このようなジャン・ヴァルジャンの人生に変化をもたらした人がいます。ミリエル主教です。彼は泊まる場所を見つけることができず、彷徨っていたジャン・ヴァルジャンを歓待しました。彼に暖かい食事をもてなして主教館で寝かせてくれました。しかしジャン・ヴァルジャンはミリエル主教の銀の皿を盗んで逃げてしまいました。ジャン・ヴァルジャンは警察に捕まりました。警察は盗品を確認するためにジャン・ヴァルジャンをミリエル主教のところに連れてきました。そのときミリエル主教は、ジャン・ヴァルジャンが盗んだ銀の皿は自分があげたものだと言ったのです。そして「なぜ燭台は持っていかなかったのですか」と言いながら燭台までジャン・ヴァルジャンにあげました。警察はジャン・ヴァルジャンを開放するしかありませんでした。警察が帰った後、ミリエル主教はジャン・ヴァルジャンにこのように話をしました。

「ジャン・ヴァルジャンさん、あなたはもう悪のものではない、善のものです。私はあなたの魂を買ったのです。私はあなたの魂を暗黒な思想や破滅の精神から抜き出して、そしてそれを神にささげます。」

この一言でジャン・ヴァルジャンは新たに生まれ変わりました。そして一生愛を施し正しいことを行いながら過ごそうと努力しました。

私が冒頭でこのように小説『レ・ミゼラブル』を紹介するのは、ミリエル主教がジャン・ヴァルジャンに言った言葉が今日の聖書日課のみ言葉と同じ内容であるからです。聖書日課にはこのように記されています。

「あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。だから、自分の体で神の栄光を現しなさい。」(1コリ6:20)

このみ言葉は、昔は洗礼式の式文の中に使われるほど多くの信仰者たちが心の中に収めていたみ言葉です。ミリエル主教はジャン・ヴァルジャンに燭台を渡し、「この世の光になって生きていきなさい」という無言のメッセージを伝えたのです。

今日ご一緒に読んだ聖書日課の主題は「召命」です。信仰者は誰でも神様に召されて生

きる存在です。そして、生きていく間様々な出来事を通して現れる神様の「呼びかけ」に応えながら生きていくのが信仰者の人生です。しかし、多くの人には「召命」とは神様が特別な人に特別なことを任せるため、「召命」を伝えるというような特別なものであると思っています。もちろん、特別な人々には特別な召命が与えられもします。しかし、大部分は見た目にも平凡なものなのです。

今日ご一緒に読んだヨハネによる福音書やサムエル記を見ても、平凡さが分かります。神様は平凡な夢を通してサムエルをお呼びになりました。声も普通で、サムエルが師であるエリに呼ばれていると勘違いするほどです。それでサムエルは三回もエリのもとに走って行きました。イエス様がフィリポとナタナエルをお呼びになる場面も同じです。とても平凡です。フィリポにはただ「私に従いなさい」とおっしゃったのでした。ナタナエルに対する呼びかけはフィリポを通して平凡に行われました。フィリポがナタナエルに「メシアであるナザレの人、イエスという方に出会った」と知らせると、ナタナエルは、「ナザレから何か良いものが出るだろうか」（ヨハネ1:46）と無視するほど平凡でした。もちろん、その呼びかけは「召命」として受け入れる人にとってはかけがえなく大切であり決定的な出来事となります。

「召命」の出来事はこのように平凡なこととして訪れますから、ちゃんと意識し注意して聞かないと見逃してしまいます。ですから信仰者はみ言葉にしっかり耳を傾けて、それを胸のなかに大切に収めて生きていく心得が必要なのです。今日ご一緒に読んだサムエル記の内容はそれをよく教えてくれます。サムエルは師であるエリが教えてくれた通り、神様の呼びかけにこのように答えました。

「主よ、どうぞお話してください。僕は聞いております。」（1サム3:10）

ナタナエルもみ言葉を胸の中に収めて生きていく人でした。私たちはそれを、イエス様がナタナエルに「わたしは、あなたが・・・いちじくの木の下にいるのを見た」とおっしゃったことから分かります。当時、ユダヤ人はいちじくの木の下に座って律法を研究したり黙想をしたりしましたので、イエス様がナタナエルのそのような様子をたびたびご覧になったと言われて褒めてくださったのです。ですから、ナタナエルも神様のみ言葉を胸の中に大切に収める人であるということが分かります。

ジャン・ヴァルジャンもみ言葉を胸の中に大事に収める人でした。小説の最後に、ジャン・ヴァルジャンは、娘のように育てたコゼットにミリエル主教からもらった燭台を渡します。ジャン・ヴァルジャンは逃げながらもその燭台を大事にしていたのです。これは、ジャン・ヴァルジャンがミリエル主教から聞いたみ言葉を胸の中に収めて生きてきたということを示す証拠であります。

ところで、この世の中には神様のみ言葉を疎かにしながら生きていく人が多いです。聖書のみ言葉をありきたりの物語であると思って、聖書をほったらかしにしたりもします。

聖書を一度読んで古臭い陳腐なものであると思ったりもします。彼らの中には自分の欲望に応じて生き、自由を楽しみ、それがモダンな生活であると思っている人が多いです。自分のやっていることをプライバシーであると思っけて干渉されることも嫌います。しかし、使徒パウロは、今日ご一緒に読んだコリント書を通して、そのような自由が間違っているかもしれないということを厳重に指摘しています。

「わたしには、すべてのことが許されている。しかし、すべてのことが益になるわけではない。」(1コリ6:12)

信仰者が洗礼を受けて信仰者として生きていくということは、神様の体の枝になって生きていくことです。自分の意志や思い通りに生きるのではなく、神様の意思によって生きることです。神様のみ言葉による介入を受け入れることです。思い出してください。悪霊に取りつかれている人がイエス様に向かって「ああ、ナザレのイエス、かまわないでくれ。」(ルカ4:34)と言ったではありませんか。

信仰者は洗礼を通して神様の体の枝になったので、体の中心である神様の意志に従って生きることが自然なことです。それは教会という言葉からも分かります。教会という言葉が英語でchurchと言いますね。ところで、このchurchという言葉は「主に属する」という意味を持っているギリシア語の「クリアコン (kuriakon)」から由来しています。ですから教会に連なっている信徒たちは「神様に属する存在」なのです。そこで使徒パウロは、「自分の体で神の栄光を現しなさい」と勧めているわけです。

今日ご一緒に読んだ福音書には、神様のみ言葉を胸の中に収めて生きていき、神様の栄光を現わそうとする人々のための特別な恵みが紹介されています。それは、イエス様がナタナエルにおっしゃったみ言葉です。イエス様はこのようにおっしゃいました。

「はっきり言っておく。天が開け、神の天使たちが人の子の上に昇り降りするのを、あなたがたは見ることになる。」(ヨハネ1:51)

このみ言葉は、ヤコブが兄のエサオを避けて叔父ラバンの家に逃げる途中、ベデルというところで疲れて倒れて眠りにつき、夢を見た内容です。神様は、地から天に届く階段と、その階段を天使たちが上がったり下がったりする姿を見せてくださりながら、このようにお伝えになりました。

「見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない。」(創28:15)

眠りから覚めたヤコブは、このみ言葉を胸の中に深く刻み込み、そこに記念碑を立て、油を注ぎました。このように神様のみ言葉を胸の中に深く刻みながら生きていこうという気持ちがあったから、ヤコブは試練を乗り越えて、再びイスラエルの土地に戻ってきて、信仰の祖先になることができました。イエス様がナタナエルにおっしゃったのは、こうい

う意味だったのです。神様はいつも共におられ、約束なさった祝福を与えてくださるということなのです。

この信仰をより強固にするために使徒パウロはこのようにコリント書に記しました。

「神は、主を復活させ、また、その力によってわたしたちをも復活させてくださいます。」(1コリ6:14)

相変わらずコロナが拡大しています。けれども神様はいつも私たちと共におられるので安心してもよいのです。神様はご自分のみ力を持って私たちを守ってくださるでしょう。

この一週、自粛と忍耐の時間、神様のみ言葉によって新しい力と勇気と恵みを得られますように心からお祈りいたします。